

ふろしき代わりにしてそこにミカンを入れ、学生達がオーバーのはしを持ち合って旅館に引きあげたのでした。学生達は十人ぐらいもいたでしょう。旅館に帰るとみんなで車座になって盛んに食べていました。鹿児島商業で最初に講演するときのことでした。この学校では一度も講演は成功したことがないといわれていました。それは学生達が騒ぐからです。また中には講演会のあるときは眠る時間だといって講堂のうしろのほうに坐る学生もいたということでした。私の場合は幸いにみなよく聞いて喜んでくれました。校長先生のご紹介のおこたを黒板に速記して、それを読みかえしてみせたものですから最初からびつくりしてしまいよく聞いてくれました。全国大会に参加した同校選手が鹿児島から上京する途中、下関で通りかかった学生が本を小脇にかかえているのを見て、「なまいきな学生だ、なぐつてやろうかと思った」といつていました。本はカバンに入れて肩に下げていくものと思つているのでしょうか、そういう気質の学生達でした。それがすっかり私になつて私が鹿児島を出発して帰るとき、次の駅まで送つてゆくというのです。私はそんなことをしないでというのですが、聞き入れません。鹿児島発の汽車が次の駅に着くと向こうから鹿児島に行く汽車がとまっており、両方の汽車が一分間ですれ違うのです。いよいよ私が出発するため鹿児島発の汽車に乗ると大勢の学生達がいっしょに乗り込むのです。そして次の駅に着くと、もう向こうから鹿児島に行く汽車の発車のベルが鳴っているのです。学生達は走って行って向う側の汽車に乗り移るのです。そしてすれちがって発車する汽車の窓から顔を出し、涙を流しながら手をふり、私の